

## 目の良い人・目の悪い人

マタイ6：22～23で主イエスは「宝／富」の譬えに続いて「目」のたとえを語られた。「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁ってれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう」と。「目が良い（澄んでいる）」とか「目が悪い」という表現（原語ではそのようになっている）で、主は何を言おうとしておられるのか。ただ単に、肉体的に目が良いとか悪いとか言っておられないことは明白である。

実は、これは隣人に対する人の心の在り方を表すユダヤ的表現のひとつであった。例えば、箴言の記者は言う、「寛大な人は祝福を受ける、自分のパンをさいて弱い人に与えるから」と（22：9）。ここで「寛大な人」（口語訳では“人を見て恵む者”）は原語では「目の良い人」である。同じく箴言23：6「強欲な者のパンをむさぼるな。供される珍味をむさぼるな」の「強欲な者（口語訳では“物惜しみする人”）」の原語は「目の悪い人」である（箴言28：22も参照）。

以上から分かるように、「目の良い人」というのは、隣人に対して寛大な人、物惜しみしない人を意味し「目の悪い人」というのは、肉体的に目が悪いということではなく、困っている隣人、貧しい隣人に対して目が悪い人、すなわち、寛大な心のない、物惜しみする人のことを意味する。これは「天に宝を積まず、地上に宝を積む」すなわち地上のもののみを「宝」として、それに心が執着して生きる人の生き方である。

それに対して主イエスは弟子たちに、隣人に対して「目の良い（澄んだ）人になれ」と言われる。すなわち、この地上のものに心が執着せず、自らは神の主権的恵みに信頼しつつ、寛大な心で隣人に接し、惜しむことなく分け与え、助ける人となれと言われる。これが「天に宝を積んで生きる」「目の澄んだ人」の生き方である（第1テモテ6：17～19参照）。

私たちは、目が悪くなれば眼科医に行って目を調べてもらい、適当な処置をしてもらう。私たちの心の目もたえず神のみ言葉によってチェックされ、キリストの御霊によって清めていただく必要がある。神に対する私たちの信仰（の目）は澄んでいるであろうか。兄弟姉妹や隣人に対する愛の心（目）はにごってはいないであろうか。明るく、輝いているであろうか。

次の言葉は荒野の旅を終えて約束の地に入ろうとするイスラエルの民に語られた主なる神の言葉である。心にとめたいと思う。

「あなたの神、主が与えられる土地で、どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。・・・よこしまな考えを持って、貧しい同胞を見捨て、物を断ることのないように注意しなさい。その同胞があなたを主に訴えるならば、あなたは罪に問われよう。彼に必ず与えなさい。また与えるとき、心に未練があってはならない。このことのために、あなたの神、主はあなたの手の働きすべてを祝福してくださる。この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい」（申命記15：7～11）。

